
お遊び部の神運女子高生

コマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お遊び部の神運女子高生

【ZPDF】

Z0052K

【作者名】

コマ

【あらすじ】

平瀬ひとみは、特にこれといった特技も無い、運動は苦手で友達作りも苦手という大人しい女の子だった。そんな彼女は、部活をしようと思つたが、何をしていいか分からぬ。そんな中見つけた怪しそうな部活「お遊び部」。彼女はそのドアをくぐつてしまつ。そして超オレ様至上主義の美少女系部長、不動臨と麻雀対決をすることに、そこで彼女のとんでもない才能が開花する。

お遊び姫姫と打ち女子高生（前書き）

麻雀用語とかがポンポン出でますが、麻雀が中心の小説ではないです
お遊びが中心です。

お遊び部部長と代打ち女子高生

春。

私、平瀬ひとみは光里高校に入学した。

この辺では、ランクは中くらい。結構がんばった末の合格発表では嬉しさに姉と抱き合つたりしたのもまだ記憶に新しい。

入学式からまだ3日、慣れない校舎を私は一人で歩いていた。友達といえる友達もあまりいない。いることはいるんだけど、私よりも友達を作るのが上手みたいで、すでに新しい友達と一緒にだ。

まあ、私はちょっと友達作りは苦手だつたりする。だから、ちょっと退屈。

別に話しかけたりできないわけじゃないけど、やっぱりなかなか友達、というのは作れない。

今は放課後。

家にまっすぐ帰つてもいいんだけど、ちょっと部活動でも見てみようかな、と思った私は校内を歩き回つている。

ちなみにグラウンドや体育館には用がない、なぜなら私は運動が苦手だから。

中学時代は、体育の持久走ですでに必死、それ以上の運動なんてしてこなかつた。

「……お遊び部？」

変な名前だな……

私はその教室の前で立ち止まつた。『お遊び部』のプレートがついた部屋は、授業に使う教室よりはちょっと狭いくらいの広さみたいで、中を覗ける窓が存在しない。

手作りにしては妙に完成度が高い、『誰でも歓迎』と書かれた怪しそうな看板が立てられている。

ほんと、なにこれ？

入りうか、やめておくべきか、迷っていた。

どう考へても怪しいのだが、お遊び部といつもの興味がある。

迷つていると、突然教室のドアが開いた。
まさか、立つてするのがばれた！？

「うわああああああー！」

そして教室の中から、なぜかトランクス一枚の男子生徒が飛び出してきた。

……え？ そういう部活……？

ダッシュで私はその場を去ろうとした。だがしかし、それをなぜかトランクス一枚の男子生徒に阻まれる、なんで！？

命の……危機……！

「あ、あの……」

逃げないと……

「助けてください……！」

「は、はい？」

男子生徒はいきなりその場に座り込み、頭を下げる。

いやいや、こっちが助けてほしい。でもこの人もなにか尋常ではない事情がありそうだ。というか尋常じゃない目にあつた後っぽい。

パニックになりかけた私に、教室の中から声が掛けられた。

「あ？ てめえがそいつの代打ちか？」

「へ？ 代打ち……？」

「じゃあさつさと入れ、そんでそこのボケ……途中で逃げてんじやねえよ……」

「ひいつ！」

ついに私は、そのドアをぐぐつてしまつた。
お母さん、私、死ぬかもしれません。

教室の中は、異様な状況だつた。まず、こちやこちやしている。あちこちにトランプやら、花札やら、チエス盤など、確かに遊びに使えそうなものがいっぱいある。

そして教室の真ん中では、1つの机に3人の生徒が向かつていた。1人は髪が長い、男子の制服を着た……女子だよね？ という感じの美少女？ でも態度がものすごくでかくて、声も質は高いんだけど怖い。

そしてその横に2人。いずれもなぜか上半身は裸で、顔面は蒼白。尋常ではないことが起きようとしているらしい……

「座れ」

「え、でも……」

「座れ。犯すぞ」

ひいっ！ 怖すぎます！

今すぐ帰りたいですが、とにかく座らないとマジで危なそつなので、とにかく机に座る」とこした。

「あ、あの……」

「あん？」

「女の子……ですよね？」

プチん、と何かが切れる音がした。

それと同時に、三人の顔面蒼白の男子生徒の顔が、ぞりぞり真っ白になる。

まさか、まさか」と言つちやつた……？

「死にたいらしいな……」

「い、いえっ！ そんなことは……ただすつゝく可憐らしにお顔を」

「へ、へえ……お前はどうも自分を追い込むのが好きらしいな、マゾか？ 調教してほしいのか？」

「ひいっ！ 『めんなさい…』

美少女、改め美少年。といつかもつなんでもいい、怖い。

「で？」

「はい？」

「お前麻雀打てるの？」

「あ、いえ……2・3回もったべりこで」

「OK、大丈夫だな」

「ちよつとー？ おかしくないですかー！？」

「なにも、ただ負けたらここに回り回りあわせ

「わ、私は女子ですよー！」

「知るか」

やばい、お怒りだ……

麻雀なんて、親戚のおっしゃると少しやつたことがあるだけで、ルールも基本的なことしか知らない。

あの時はなぜかおっちゃんが泣いていたけど、多分運が良かつただけだし……

ううう、ううう。

考えている間にも、牌は自動で並べられていく。

全自动だ、すごい。だけど今はそのハイテクいません。

もう、勝つー。決めた。

平瀬ひとみ、ここで勝てなきやマジで殺されるー。気合を入れるんだ！

とにかく自分の牌を確認する。

全自动だから、相手がイカサマしてくるつてことは無いと思つた
ど、それで圧勝してるんだから、相当強いといつてなんだね。
「うちは素人なのに。」

牌を並び替える。その動きも、美少年？ に観察されてついで怖
い。

私の手は、マンズ一色だ。そして1と2のコーチができる。
後は3 4 5のショーンツにマンズの3・4・6・8。

……勝てる気がしてきた。

最初のツモは、マンズの8だ。

ということは、6を捨てて、8が頭の……2面待ち。えっと、確
か全部同じ色だつたらチンイツだつたつけ。あとドラ表示牌がマン
ズの9だから、ドラ3だ。

「よしつー リーチ！」

「はあー？ ダブリーーー？」

よし、想定外というコアクションだ。
案外勝つちゃうかもしれないなあ。

「うー、どうなってんだ？」

美少年は私の顔を睨みながら牌を捨てた。北だ、全然関係ない。
他の可哀想な男子高校生もみんな字牌を捨てて、かすりもしない。

そして私のツモが回ってきた。

マンズの5だ。ということは、

「ツモ」

「はあ！？」

「おおっ！ 激しいですよ！」

後ろでトランクス一枚の男子生徒が声を上げた。
うん、お願いだから視界に入つてこないでね。でもこの手はやつ
ぱり凄いみたいだ。

「ダブリー、一発、イーペーロー、チンイツ、ドリラ3。えつと裏
乗つてドーラ6。ほんと凄いな……」

「ちよつと待て！ なんだそりや！？」

「数え役満……俺も初めて見る……」

ジャラジャラと私のほうに点棒が流れてきた。
勝てた！ とにかくめちゃくちゃ勝てた、これで少しは大丈夫な
はずだ。

牌は回収され、また全自动で並び始める。

そして私の牌、えつと……うわ、全部2つずつだ。確かこれ、チ
ートイツつてやつだ。あとは東だけで和了だ。
私の最初のツモ……来た！ チートイツだ！

「ツモー」

「……は？」

「チートイツ」

「じゃなくてチーホーですね……うわあ、テンション上がりつけてきた！」

後ろから男子高校生が解説してくれる、チーホーってなんだっけ。

「また役満……」

点棒が私のほうへまた流れてきた。

さつきから凄いな、私。今日はすげく運がいいみたい。今度は私が親だ。

牌を並べ替え、確認する。

白と發が3枚ずつ、中が2枚か。といつことは小三元がすでに成立している。

後ろから覗き込んでいる男子学生は、「なんなんだこの麻雀は……」と、ものすごいテンションが高くなってしまっていた。

お願ひだから立ち上がらないでね……。

「ふう……」

「おや、そんなおあきらめですか」

「いや？ 違つけど？」

美少年はその目を、鋭く尖らせて私をにらみつけた。
背筋に、何か冷たいものを感じて私は一瞬震えた。

「殺しに行く……」

……焦つてはいけない、どんなに怖くても平常心を保たないといけない。

とにかく、いらない牌を捨ててこう。まずは西……

「ポン」

前に座っている美少年が鳴いた。しまった、向ひの風だ……

今度は場に南が捨てられる。

「ポン」

また鳴くのは美少年。

回つてこない……

今度は田が捨てられた。カンすべきか、しないべきか。この辺の判断はいまいち分からないな、素人には。
でもおっちゃんは基本的には鳴かないほうが良いくて言ってたからやめておこう。

ツモは、東……

風だけど、これ一つしかないし、もつ後ちょっと大三元テンパイだし、捨てちゃおう。

私は東を捨てた。

「ロンツ！」

「はひいっ！」

「ツーイーソーシャオスーシー！ ダブル役満！」

「やはり不動さんも強い…… 神がかり的に」

「ここまで勝つた分全部取られてしまった、ダブル役満ってなに……？」

「そういえばあの人不動つていうんだ。」

また牌が集められ、つまれていく。

ガラガラと牌が回る音がする中、私のツモのせいで点棒を失つて
いる横の上半身裸の男子生徒2人の顔はどんどん青ざめている。

牌を確認する。

えっと……うーん、いまいちよくないなあ……

「いや、あの……相当の良い手ですよ、これ」

私の気持ちが分かつたのか、後ろから男子生徒が私に耳打ちする。
そう、なのかな。中が2つあつて、後はバラバラなようにも見える
んだけど。

「三色同順が狙えますね」

三色同順……？

分からぬ。とにかく全部そろえるために、ソーズの9から捨て
よう。

「なぜそれをつー？」

あれ、間違ってる？

疑問をちょっと残してしまったが、麻雀はどんどん進んでいく。とにかく、色をそろえるために牌を捨てまくつていい。パチパチとしばらく静かに牌が動く音だけが響いている。

「巡回、私の手牌もだんだんまとまってきた。中が頭で、残り全部マンズまできた。あとは……」

「中切るのー？」

「え？」

「ロン」

「ああつー」

不動さんのロン。しまった……

「小三元トイトイで親つ跳ねだ」

「うう……」

やばこよ、結局点数では不動さんに負けてしまつてこる。

そして、次の私の手牌は、

最初からソースの3・4・5・6の四一ツ。そして待ちは南。と

りあえず第一シモのマンズのらは捨てる。

「……お前リーチ掛けないのか？」

「え！？」

なんでテンパイだとばれたんだ奴！。

「ちつ、なんなんだよこいつ……」

不動さんは大きなため息をつくと、自分の手牌に田を落とした。
そして、しばらぐ考えた後に捨てたのは、私の待ちの南だ。

「ロンっ

「ぬあああ！ なんなんだお前は…」

「スーレンパー」

「おかしい！ そんなことが起じたまるか！」

最後の私の役満で点数はひっくり返った。

また私の大勝。よし、このまま進めば勝てる、生きて帰れるよ……
それにも不動さんは、かなりいらいらしているみたいだ。まあ
あ私みたいなド素人に負けてるんだから、しょうがないといえばし
ょうがないのかな。

もう、ほんとに。いつ麻雀卓をひっくり返して強硬手段に出るか
と思うと冷や汗が止まらないよ。

そして次の私の配牌。

白、發、中の「コーシ。つまり大三元、しかも東の「コーシもできてる。後一つ、頭になるのはマンズの♀だ。

「ちつ、また強いんだろ?」

「あ、ツモ」

「なんなんだお前! ほんとどうなつてんの! ?」

マンズの♀を頭にした、えつとこれは……

そんなときは、後ろのトランクス一枚の男子学生が解説をしてくれる。

「えつと、スーパーんコ一単騎、大三元、ダブル役満ですね」

「せつ、金員……ハコつたじやねえか……」

「」の麻雀はどうやら箱下ありというルールらしいので、点棒が無くなつても続く。そして借金分は、身包みを剥がれる」となるみたいだ。

いつの間にか、横の2人もトランクス一枚になつてている。なんか、目のやり場に困る。

ついにマイナスに突入してしまつた不動さんも、かなりいらっしゃながら制服のブレザーを脱ぎ捨てた。

「べれてやるー。」

「いりませんよ」

「いや、受け取れ！ 奪い返す！」

不動さんは、もう私しか見ていなかった。
怖すぎるので……

そして私が親で、この配牌……

「国士無双、天和」

お遊び部の二〇の教室に、怒号が響き渡った。

美少女研部長とワイルドロー4

「……では、新入部員を歓迎する」

「え？ 誰か入部する人いたんですか？」

「あ？ なに寝ぼけてんだ、てめえだよ。平瀬ひとみだよ」

「え、ええ！？」

新入部員歓迎と書かれた足跡っぽい横断幕が、制服を取り戻した男子生徒たちによって持たれている。

ちなみに制服については、私が大勝ちしたので救済措置として持ち主に返還した。

それで、なぜ私が入部を……

「お前の引きの強さは必要だ」

「で、でも……」

「安心しろ。入部届けなら提出済みだ」

「全く安心できません！」

私の言葉はあまりに無力だった。

学園は社会の縮図だという。私のように、権力の無い人間は、あやつて上の人間に無理やり言つことを聞かされるんだ。

私が諦めに入っていると、男子生徒たちはぞろぞろと退出して行

つた。

「あれ、あの人たちはお遊び部じゃないんですか？」

「当たり前だ。俺があんなのを入れるわけがない。あいつらは確かに……エアホッケー部だったか」

「や、そんな部活が……」

ちょっと楽しそうかも。

「やうこえは他の部員はいないんですか？」

「いや、いる。今日は来てないみたいだが

内心ほつとした。

不動さんと2人きりでやつていい自信は全く無かった。
なんか性格は、ちょっと……ではなくものすごく怖いんだけど、
容姿で言えば美少女といつても過言ではないほど、なのに男子。
というか本当にじつちなんだろう……

肩くらいまでの綺麗な髪、それに肌も男子とは思えないほど綺麗な白。

まあ胸は、一応自称男子みたいだから無いけど、もしかしたら控えめなだけかもしれないし。

男子だといわれても、目の前のそれを私が男子だと認められない

「……なに見てんだ」

「えつ、いや、なんでも」

「そりかよ」

不動さんは立ち上がると、教室の中を歩いてこや、かばんの前で立ち止まつた。

そして中から、携帯電話を取り出した。

「誰か呼ぶんですか？」

「ああ、そりだ。うちほりひつじの部活なんだよ」

携帯を操作し、携帯を耳につける。

「おい、美少女研究部

そんな部活まであるんだ……

「あ？ 僕だ、分かれボケ。

……そりだ、今日は……どりすつか、3人よこせ、じやんと勝つたら景品持つてくれるから、つかもつ留る。

……あー違う。今日入ったバカだ、勝つたらそこつやるよ、メイド服でもスク水でもなんでも着せてやれ、じゃあ今すぐな

不動さんは携帯をかばんに放り込んだ。

おかしいなあ、足が震えて止まらないよ。今すぐ走つてこの教室から去らないと、何かやばいことになる予感……

「おい景品……じゃなく平瀬」

「いひー、今景品つて言わなかつたですかーー？」

「ああ、そうだ」

認めたあー！

「の人やばいよ、隠されるのもそれは嫌だけど、そんなストレートに酷いこといわれるとは……」

「大丈夫だ、勝てば向こうもそれなりに失う。てめえはそれを丸い」と受け取るだけだ。まあ少しは部に回すがな

「そりゃじゃないです！ 私が言ひたのは、私が負けたときの「じで……」

「あー」

「あー、じゃないですよー。」うちの都合も考えて……」

「だつて負けるとかありえねえだろ」

当然のように、なんて無責任な。

思わずため息が漏れる。

廊下を誰かが歩く音が聞こえる。

パタパタとどんどん近づいてくる。ああ、来た……
心臓はものすごく速くなつていて、どうしよう。まあ学生なんだ
し、負けたつてそんな無茶は……
やりかねない気がしてきた。

「あつ、来たでー」やれるよー！」

露骨にオタクっぽいのがやつてきた。
黒ぶちめがね、ぼわぼたの髪、ぱっちやり体系。そしてなんか息
が荒い……

なぜか学校内なのに、ジーンズの上にTシャツ。そしてシャツにはなんか美少女のイラストが書かれている。
そしてその露骨なオタクの後ろには、大人しそうなクラスの男子A・Bみたいな普通の男子生徒が2人ついていた。

「おー、来たか。まあ突つ立つてろ」

密を全くもてなさない不動さん。

うーん、同じ男子でもこうも違つんだなあ……

「ま、まさかこの子が今日の……！」

「そうだ、勝つたら約束どおり、バニー服でもウエディングドレスでも着せてやれ」

「最後のはダメえ！ ていうか全部嫌ですよーー！」

私の抗議は全く聞いてくれない……

「だがてめえらも、負けたらちゃんと負け分払つてもいいつぞ？」

「当然！ 今日は我が部の超お宝ですぞ！」

露骨にオタクっぽい人が言つと、後ろの男子生徒2人が、教室の外から何かを抱えて入ってきた。
マネキン、だろうか。

「ミクたんの等身大ファギュアですぞ！」

不動さんが舌打ちし、「いらねえよ……」と呴いたのは多分私にしか確認できていないはず。私も同感です、でも不動さんはしきりに換金すれば、とぶつぶつ何かを考えている。

「……まあ、いいだろう。それで勝負だが、……」

不動さんは、立ち上がり教室の「ごちやごちや」の中から、四角いケースを取り出してきた。プラスチックのケースだ。

「UNO」というカードゲームだよ

「そ、そんなもので私の命運が……」「

「 そ う は 言 う が 、 こ れ は 奥 が 深 い ゲ ー ム だ 」

不動さんはカードを慣れた手つきで配つていいく。

UNOは1人7枚の手札を持つてスタートする。そしてカードの種類は大きく分けてまず赤、青、黄、緑の4色に分けられ、さらに色ごとに数字のカードと、ドロー2、スキップ、リバースの記号カードが存在する。

そしてそれ以外の例外カード。ワイルドカードと呼ばれて、いつも出せて、色を自由に指定できる。さらにそのワイルドカードと同じ効果に加えて4枚のカードをドローさせる、ドロー4というカードがある。しかしどロー4は、他に出せるカードがあればそちらを優先しなくてはならない。

まあドロー4を持つていればそこそこいい手といえるかもしけな

い。

そして私の手札。
ドロー4が3枚、緑のスキップが2枚、赤と青で3が2枚。
周り順は……

「俺からスタートで、部長、平瀬、A、Bの順な」

「「俺はA（B）ですか！？」」

思わず、私は吹き出しそうだった。

「ドロー4」

いきなりドロー4……でもそんなことしたら……

「チヤ、チャレンジッ！」

チャレンジとは、ドロー4は他に出せるカードがあれば使つてはならない、というルールを破つてていると思えば、その次の順番の人が使える権限。

この場合だと部長が不動さんの手札を確認し、実際にルール違反なら不動さんにペナルティ、でも、

「なつ、ふ、不覚……」

ルール違反ではなかつた場合は、チャレンジを使った人がペナルティ。ドロー4の4枚に加え、追加で2枚引くことになる。

「色は赤だ」

「へへ……！」

赤は手札に無かつたらしく、部長はついにカードを引いた。

次は私の番だ、とりあえず赤の3を出す。

A、Bはそれぞれ数字のカードを出し、黄色のカード不動を3回
る。

「ドローアー2」

そして部長も、

「ドローアー2！」

私は、1Jの場合は絶対にチャレンジされないから、ドローアー4を一枚出す。

色指定だから……

「縁で」

「ドローアー2」

「ドローアー2」

「ドローアー2」

とふとふと、ドローアー2が出されていく。そして部長は、唸りながら、合計14枚のカードを引いた。

そして部長は緑の2を出した。

「スキップ2枚」

私は手の中の緑のスキップを2枚出す。

「「飛ばされた！」」

A、Bが全く同じリアクションを取っているときに、不動さんもスキップを一枚出した。

「ぬおつー」

といつことは、また私だ。

えつと、青の3は出せないから、ドロー4を一枚。

「青」

「くつ」

Aは4枚のカードを引いた。そして青の5、赤の5、緑の5の3枚を出す。

そしてBは緑の7。

その直後に間髪入れずに、不動さんはドロー4を出した。

「まつまたー！」

「青だ、やつをと出せ」

「なんでドローワー……」

部長は黄色の9を出す。それなら次の私は。

「ドロー4、ウノ」

「またかよー」

Aは4枚のカードを引く。

……あれ？ ドロー4つで4枚しかないはず。なのに5回引いたよ
うな……

Aはカードを引いた後、ドロー2を出した。

そしてBもドロー2、色は青。不動さんはずドロー2で返す……の
ではなく、カードを4枚引いた。そして青のスキップを出す。

と、こうことば。

「上がりつつー！」

良かつた……

なんとか、自分の体を守ることができた。

「へつらおおおおおおおおおおー！」

部長はその場に崩れ落ち、床を叩いた。

目からは涙がぽろぽろと零れ落ち、床を濡らす。木でできた床は、
すぐにその涙を吸い込んでしまった。

A、Bも、崩れ落ちてはいないが、その場で体を震わせ、涙を流
している。

あのフィギュア、凄く、大切なものだつたのかな

「スク水……バーチ……ブルマアアアアアア！」

「同情の余地も無いよ！」

「メイド、服……」

悔しがり方が爽やかじゃない。
トヨダトヨタヨリヨリ。

「いいやたん……」「ねんば、また会こに来ぬで」「やれぬから」

「は?
即行売却に決まつてんだろ?うが」

「「「バカな！？」」」

3人が立ち上がり、不動さんを睨む。

「あなたは、愛する人を売るというのですか！？」

「つっせーよ、ちよつと綺麗っぽいセリフ使つてんじゃねえ。てめえらは愛する女をギャンブルに使つたんだぞ？」

「ぐつー…………そうだ、確かに我等が間違つていた…………」

3人はどんでもない」とを言った。

「「「仕方ない……」」」ちは3人、強硬手段に出るー。」「

「なに言つてるんですか！？」

「ほう……来いよ

「ええ！？」

言つてはなんなんだけど、不動さんは体の線は女の子みたいに細いし、どう見ても腕力があるほつには見えない。

それに相手は平均的な男子高校生A、Bに、ガタイはほつちゃりながらガツチリだと思われる部長。なんか、この図柄嫌だ……

しかし事は、私の予想とは全く別のほつに進んだ。

「ぐはつ！」

「うわつ！」

「うわつ！」

一瞬にして、部長とA、Bは吹き飛び、教室の扉の近くまで飛んでいった。

「……え？」

私は言葉が出なかつた。

何が起こつたのかは全く分からぬ、ただ不動さんに詰め寄つた

3人が一瞬にしてあそこまで吹き飛んだのだ。

「さて、強硬手段だな……？」

「「「ひいっー。」」」

「」からは不動さんの後姿しか見えない、でも……どんな顔をしているのか、なんだか想像がつく。

「一度と笑えなくしてやる……」

「「「ひいやああーーー。」」」

一目散に逃げ出した3人を追つて、不動さんが教室を飛び出していった。

……私、どうしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0052k/>

お遊び部の神運女子高生

2010年10月13日14時33分発行